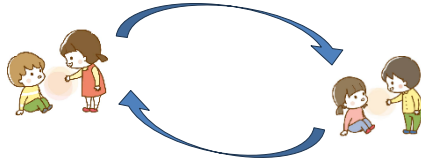




「役割」



吉崎グレイス

役割と聞いて、家庭での…職場での…そういったことをイメージされるかもしれない。言葉の定義ではないけれど、私なりに整理するなら、役割という概念が成り立つのは、二人以上がいる場や社会におけるものだと思っている。

ライフリーでは、この「役割」が結構目まぐるしく替わり、移動するのを目にする。それは一日の中でも起こるし、スタッフ・利用者間でも起こるから面白い。

言うまでもないが、我々スタッフは利用者さんに対し、お世話や楽しい時間といったサービスを提供するという役割がある。これはあくまで建前上だと私は思っている。というのも、お世話をしている側のスタッフが、気づくとスタッフが利用者さんから助けられ、励まされ、力をもらっている。心のお世話を利用者さんがしてくれているといった場面は日常的に見られる情景なのだ。お世話する側に役割がスイッチした時の利用者さんの顔は往々にして、とても誇らしく、おおらかで温かな表情に見える。

職場における役職や、家庭における「親」「子」「兄弟姉妹」などは、固定したものではあるけれど、目に見えない「役割」のようなものは本来、どの場所でも流動的なものではないのか？助けているつもりが助けられ、そのつもりは無くても、誰かを励ましていることもある。意図せずとも何かしら「役割」を果たしていたということもあるから面白い。

「天から役目なしに降ろされたものは、ひとつもない」というアイヌの言葉を思い出した。



ライフリー

迷珍場面 vol. 61



※利用者さんの名前は、仮名です。

歌手 吉幾三の名前が思い出せない喜子さん。

「いま 幾三」

「よく 幾三」



絶妙に惜しいです！！

上村

娘「老いては子に？」

母「おんぶしろ」

「乗っかれ」



和上祐美子（利用者様家族）

幸子さん「わたし慶応大なの。」

私「慶応大学卒業されているんですか？！」

幸子「慶応大学病院に行ってたの。」



村石

【認知症】

牧師であり、音楽家でもあった、若年性認知症の男性が、認知症になった自分自身の思いを五線譜に綴られていた。
インターネットより抜粋

「僕にはメロディーがない…（中略）

頭の中に いろんな音が 秩序を失って 騒音をたてる…（中略）

…力がなくなってしまった僕は もう再び立ち上がれないのか

帰ってきてくれ 僕の心よ

全ての思ひの源よ…（後略）



認知症という病気は、判断能力が低下したり、記憶が曖昧になっても、その人の感情の部分は残ります。この男性のこの気持ち、認知症利用者さんの不安や苦しみを、わたしはどれだけ想像できているだろうか。私たち援助職は何ができるのだろうか…？

そんな問いが浮かんできます。人との交流を深めていけるために、感性を磨き人間力を養うという視点は、自分にとって欠かさないもので在りたいと思います。

「この人にとっての本当に必要なアプローチとは、なんだろう？」と揺れて、迷いながら、ハテナ？を持ち続けること、着地しないことが、人と人との時間に大事なことになるのではないか？と思います。AIには代われないところ！！そこが援助する側の強みでありたいですね。

わたしのおすすめ

ボクはやっと認知症のことがわかった

長谷川 和夫（著）、猪熊 律子（著）
出版社：KADOKAWA

認知症検査『長谷川式スケール』を作った精神科医が、認知症になって何を思い、どう感じているのか。
医師の時との認知症理解のギャップも客観的にご自身を語られています。
これ一つで認知症が分かる！
（ライブラリー図書に置いてあります。貸し出し可）



ロストケア

2023 年
監督：前田哲



連続殺人犯として逮捕された介護士と検事の対峙を描いた社会派サスペンス映画。
良いとか悪いとかではなく、自身の心を大きく揺さぶり、人が生きるとは？と考えるきっかけにいかがでしょう？

編集後記

感性を磨く旅へ～好き（素敵）な人に会いに行こう、素敵な作品を見に行こう、自然に触れ、季節の変化を感じよう。今は、映画や歌も本だってネットで手に取れちゃう、手軽な選択肢が増えてありがたいです。しかし便利さは人との距離を遠ざけてしまいがちです。外にでて本物に触れること、人と分かち合うこと。自分の感情を知り、認め、それを表現すること、大事にしたいものです。

村石